

ハマフエフキ

I 親魚と産卵状況

材料と方法

親魚は前年度の20尾を継続飼育して使用した。飼育方法、採卵とも前年度と同様であるが、卵重量1gあたりを従来は2,400粒であったが、今年から2,600粒に改め換算した。

結果と考察

1. 親魚飼育

昭和57年1月から同年12月までにかん水性白点病が6月から9月にかけて月に1回ずつ発生したが、7~17日間の治療日数を要したものの、その間に5尾が斃死した。いずれもかん水性白点病から脱鱗、スレ症状によりヒブリオ病に類似した疾病が要因と思われた。

前年度と同一親魚で測定結果を表1に示す。およそ1年後の成長をみみると平均尾叉長で2.16cm伸長し、平均体重で120gの増量となっている。体重の

表1 養成親魚の大きさ

No.	尾叉長 体重		No.	尾叉長 体重	
	cm	g		cm	g
1	48.0	2,900	9	43.5	2,400
2	49.0	2,750	10	48.5	2,350
3	49.5	2,640	11	44.0	2,160
4	48.2	2,580	12	45.0	2,150
5	45.6	2,540	13	44.3	2,000
6	47.0	2,460	14	45.0	1,860
7	45.0	2,450	15	41.5	2,380
8	48.3	2,420			

変動がみられないのは、ほぼ1年間産卵

を繰り返しているためだと思われる。1982年9月20日測定

2. 産卵状況

表2に月別、図1に日別産卵状況を示す。今年度の産卵は昭和57年2月10日から開始され、例年と同様、産卵停止を繰り返しながら12月12日に終了した。産卵開始は例年と似かよっているが、産卵終了は12月の中旬となった。これは暖冬異変により、水温が22℃以上の高水温となったことが原因とみられる。通算の産卵日数は306日となり、産卵回数は184回を記録した。また、冬期でも水温が20~22℃以上になれば産卵することが示唆された。

産卵量についてみると、2月は少なかったものの3~5月は産卵盛期となり、採卵量も大幅に増加して総採卵量の 124×10^6 粒のうち5割以上の約 70×10^6 粒が3~5月の3ヶ月で産卵された。その後、夏期の水温上昇とは逆に採卵量は減少傾向になったが、9月頃から採卵量が除々に増え始め10~11月には昭和56年と同様、第2の産卵盛期が出現した。100万粒以上の産卵は5月の15回を最高に4月、3月、11月、12月、6月にそれぞれ記録し、最高採卵量は4月14日の 3×10^6 粒、浮上卵率は73%であった。1日当たりの平均産卵量は 67×10^4 粒となり、盛期別にみると第1盛期(3~5月)は 100×10^4 粒、第2盛期(10

表2 月別の産卵状況

月	総卵数	浮上卵数	沈下卵数	浮上卵率	産卵回数
	粒	粒	粒	%	回
2	4,184,000	1,326,000	2,858,000	31.69	12
3	17,482,400	10,436,400	7,046,000	59.69	22
4	21,702,200	11,655,800	10,046,400	53.70	19
5	31,129,800	16,775,200	14,354,600	53.88	27
6	5,818,800	5,018,000	800,800	86.23	11
7	3,029,000	2,743,000	286,000	90.55	12
8	2,440,800	2,041,000	399,800	83.62	10
9	11,115,000	9,508,200	1,606,800	85.54	22
10	14,651,000	12,649,000	2,002,000	86.33	20
11	8,788,000	7,891,000	897,000	89.79	20
12	4,134,000	2,756,000	1,378,000	66.66	9
合計	124,475,000	82,799,600	41,675,400	66.51	184

～11月)は 58×10^4 粒であった。

以上のことからふ化仔魚から全長12～13mmの沖出し可能な大きさまで同一の陸上大型水槽による生産が最低3回は可能と思われ、水槽の多回使用による種苗量産が期待できる。

前年度の産卵期後半に異常油球の出現頻度が高かったことから、今年は3月から12月まで月別に浮上卵を120～335粒の範囲内で無差別に採取して、その出現状況を調べた。(表3参照) その結果、3～11月までは3.3～14.4%の範囲内で平均6.8%であった。この数字であればマダイやイシダイと比較して大差ないと思われ、今年は大量産卵等とあわせて順調な産卵経過だったと思われる。

しかし、12月は複数油球の出現数が多く7.3%となっており、産卵末期と低水温の影響と

表3 昭和57年 各月別の異常油球出現状況

月別	平均卵径	平均油球径	正常卵数	複数油球数	出現率
	mm	mm	個	個	%
3	0.818	0.167	154	26	14.4
4	0.805	0.165	201	14	6.5
5	0.806	0.165	112	8	6.6
6	0.798	0.162	175	10	5.4
7	0.795	0.160	145	5	3.3
8	0.757	0.165	186	14	7.0
9	0.795	0.160	323	12	3.5
10	0.772	0.159	275	25	8.3
11	0.783	0.157	129	11	7.8
12	0.811	0.164	40	110	73.33

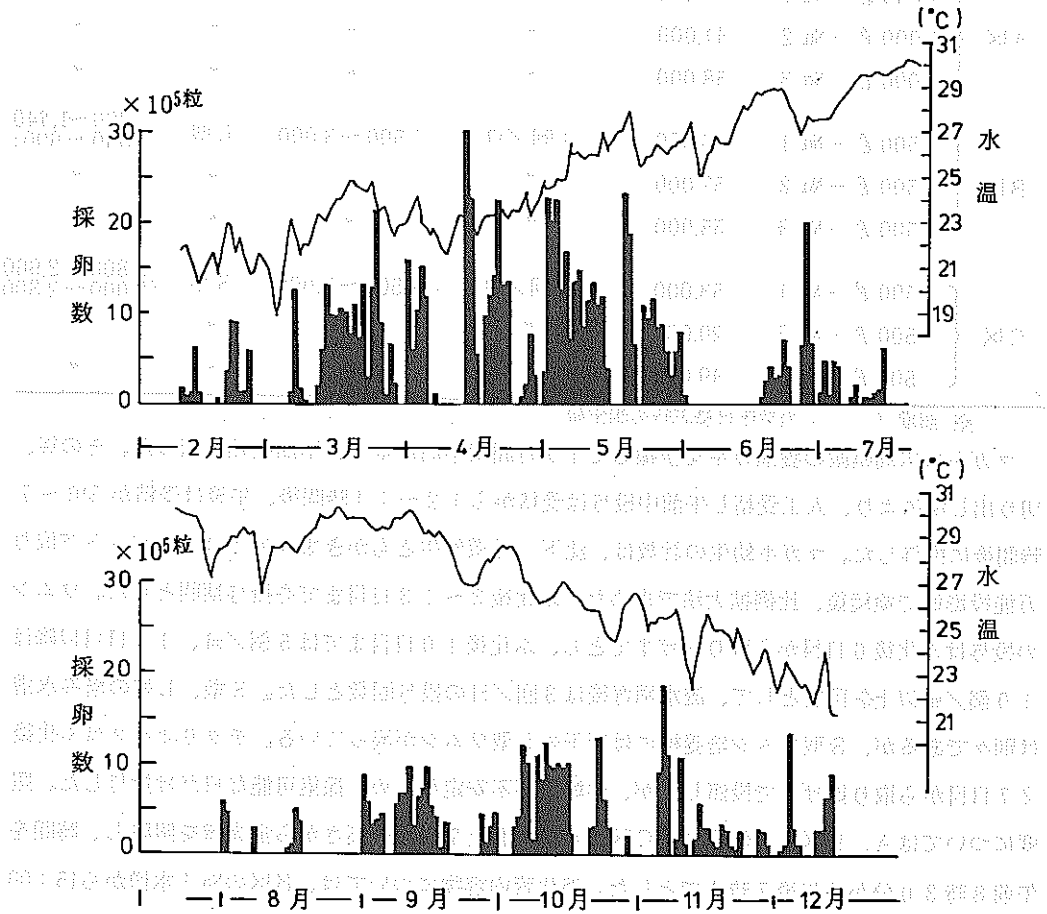


図1. ハマフエキの日別産卵状況